

総論 世界の日本研究

園田英弘

(1) 多様な日本研究

世界の日本研究は、もとより多様である。韓国の日本研究とメキシコの日本研究の間には、研究の動機やスタイルで、重なり合わない部分のほうが多いであろう。インドとスイスの日本研究には、その根本的発想において大きな差があるだろう。

1つの国の中の日本研究においても、大きな断絶がある。旧ソ連の日本研究は、最近まで日本の革命的状況を分析するためにか、社会科学系統の研究者は日本社会党や自由民主党や経団連といったような特定の組織を集中的に分析するべく研究テーマを割り振られていた。しかし同時に、オーソドックスな日本学的な研究として、^{あづけ}根付や近松の研究など、およそ革命などとは縁遠い研究もあったのである。これが日本研究の最先端国アメリカになれば、異国趣味的な歌舞伎・茶道・美術・文学・建築などから政治・経済・コンピュータまで、現在といわず過去といわず、日本のありとあらゆることの研究がなされている。

くどいようだが繰り返そう。世界の日本研究は多様である。それぞれの国は、それぞれの知的伝統のもとに、それぞれの思惑で日本を研究してきたのだから、多様にならないわけがない。この文章は、この多様な世界の日本研究を鳥瞰しようとする試みであるが、初めから無謀な試みであることは自覚している。それぞれの国の日本研究が多様であるばかりでなく、1つの国の日本研究自身が歴史的な変化を体験しているのである。そうすると、各国の多様性を視野に入れつつ、その歴史的発展の過程を明らかにしない限り、世界の日本研究を鳥瞰できたことにはならない。

この文章では、従来の人脈中心的（A先生はB先生の教え子で……）あるいは学説影響史的（C説はD説からの影響を受け……）ではなく、日本研究の類型、日本研究組織や日本研究の社会的役割の特色などに着目することによって、世界の日本研究を鳥瞰してみよう。

オーストラリアの日本研究者J・V・ネウストプニーによれば、「日本研究の発展段階的タイプ」として、ジャパノロジー型パラダイム・日本研究型パラダイム・現代型パラダイムに区別することができるという（J・V・ネウストプニー「日本研究のパラダイム——その多様性を理解するために」国際日本文化研究センター編『世界の中の日本』1988年）。ジャパノロジー型とは、日本とまだあまり接触のなかった時期に世界を知るという教養の一環として出てきた。日本の過去の政治・文化・文学・言語などの歴史的研究のことであり、東洋学という知的伝統の一部として位置付けられてきた。この立場の日本研究が確立されたのは、19世紀後半から20世紀初頭のヨーロッパや現在の発展途上国であるとされる。

日本研究型とは、英語で表現しないと理解されにくいだが、Japanese Studies のことである。ジャパノロジー型が「理論や方法論なし」の丸ごとの日本研究であったといわれているのに対して、日本研究型は歴史学や政治学や経済学などというさまざまな「専門」の観点からなされる日本研究の集合のことである。このような立場の研究が盛んになったのは戦後のことであり、現在も多く国ではこの立場の日本研究が主流を形成しているといっている。

最後の現代型は、国際的な相互依存が一層緊密になり日本の経済力が上昇したことを背景としており、社会階級・少数民族・地域社会・女性問題などに関心が向けられている。この型は「ポスト・モダンのパラダイム」と名付けられているように、日本の社会そのものが「近代」を超えた、あるいは研究者の意識や理論が「近代」後を問題にするようになったところから、この現代型日本研究が現れたと理解されている。

ネウストプニーのこの日本研究の3分類は、世界の日本研究を鳥瞰するためには非常に役に立つ。この3つに分類されているのは「発展段階的タイプ」とされているが、たんなる「発展段階」ではなく、発展段階的「タイプ」となっているのはなぜか。ジャパノロジー型から日本研究型へ、日本研究型から現代型へという3つの「発展段階」を意味しているのではなく、このような発展の傾向を示しつつも、日本研究の異なった「タイプ」として3つのものが現在あるということをネウストプニーは主張したいのだと考える。

以下では、この3つの日本研究の「タイプ」を、研究者の関心のあり方、アカデミズムとの関係、日本情報の集積の程度などから、私なりの整理をおこなってみよう。

(2) トータルな認識を目指す日本学

日本学は、学問的には東洋学から派生した。古代エジプトのピラミッドや中国の天文学やインカの古代遺跡など、過去に栄えた死せる文化や文明の探究は、古くからヨーロッパの人々の関心を引きつけてきた。読めない文字を解読し、まだ知られていない巨大建造物の謎を解く。このような知的営みが東洋学の根本を支えるものであった。その謎は大きければ大きいほどよく、その文字は解読が困難であればあるほど人々の努力を引き出すことになった。

東洋学をなりたたせているものに、もう一つのものがある。それは、右に述べたいわば純粋な知的動機というものと逆に、支配のための道具としての政治や宗教や風俗の知識であり研究である。中国学やインド学などの研究は、謎に挑戦する純粋な知的探究心や異国趣味と、外交などの実目的のための知識との不思議な総合であった。美的・宗教的な研究と、その国の権力の興亡史は矛盾なく同居できた。それは、これらの学問が、旅行家や役人や貿易商などさまざまな職業の人々の知的好奇心にまかせて、いわば自然発生的に生じたのが、その特色であったからである。

西洋の世界から見ると、日本は中国を中心とする東洋の大文明の周辺にある小さな国である。人が一生をかけてチャレンジするにはあまりに謎は小さいように見えたのは、致し方ないところであろう。日本はあくまで中国の東の海上に浮かぶ、一つの小さな島に過ぎなかった。日本学は、西洋では19世紀の末あるいは20世紀のある時期に、知的系譜としては東洋学

から分離していった。日本学 (Japanology) とは、今では古臭い日本研究というイメージで語られることが多いが、当初はまさしく新しい学問だった。

1930年代のフランス留学時代を振り返って、ライシャワーは次のように回顧している。「2年間のパリ滞在は私にとっては黄金の日々だったが、それはパリの学問の水準が高かったからではない。中国学のメッカかどうか知らないが、さほど系統立っていてもいず、日本学にいたっては全く弱々しかった。私達が手をつけた時点で欧米の日本研究が遅れていたのは、一つには日本学という用語が確立していなかった」(『ライシャワー自伝』) からだという。日本学という言葉は、アカデミズムの内部で日本が独立した研究の単位として認められるということを意味している。

初期の頃の日本研究者には、外交官やお雇い外国人として日本体験のある者か、中国学者が日本学者もかねるようになった者の2つのタイプがあった。

イギリスの日本研究は第1世代の段階では、サトウ、チェンバレン、アストンなど、退職した外交官やお雇い外国人が日本研究者の草分けとなった。中国学やインド学がアカデミズムの中に確固たる地位を占めていたフランスでは、これらの学問を研究していた者が日本学に転ずることが多かった。東洋語学校の日本語講座の初代教師レオン・ド・ロニーなどは、その典型である。

日本学の成立は、東洋研究の中に漠然と含まれていた日本研究がアカデミズムの世界で独立した研究の単位として認められたことを意味していると同時に、アカデミズム外で趣味として保たれてきていた日本の研究に東洋学の伝統が持ち込まれてきたことを意味していた。

日本学は、日本を研究対象としていることでなりたっている学問である。それは、日本の「文学」の研究でも日本の「政治」の研究でもなく、まさしく「日本」そのものについての学問なのである。そのようなことがありうるのだろうか。日本学ではその目指すところは、政治も文学も宗教も思想も言語も歴史も、そして経済もあわせて研究するのである。いいかえれば、日本に関することのトータルな認識を目指しているのが日本学だということである。

日本学の特色を確認しておこう。西洋では、アマチュア的日本研究がアカデミズムの世界で「学」に昇格するときに出てきた学問形態であり、「専門」を超えた、あるいはそれ以前の総合的な日本に関する研究をおこなうところにその特色がある。

西洋では、日本学というタイプの日本研究がその出発点になった。いや、このような言い方は誤解を招くであろう。日本学的研究は、今でも日本研究のかなりの部分を占めているのである。したがって、より正確に表現すれば、西洋では日本学はその他のタイプの日本研究を派生させる母体になったといったほうがいいであろう。

また、多くの発展途上国や社会主義圏の日本研究は、日本の経済成長や経営組織を研究の出発点としながらも、研究が深まってくるにしたがって経済現象の背後にある非経済的領域の重要性が注目されるようになった。経済と宗教、宗教と政治、政治と文学などといった単一の専門では覆い切れないものまで視野に入れられない限り、大きなテーマは十分に研究できないことが自覚されるようになってきたのである。「専門」の限界の自覚といってもいい。そ

各国別博士論文数の推移

年代	アメリカ	ドイツ	イギリス	フランス	ソ連
1910	18	19	1	2	1
1920	52	37	6	11	1
1930	100	67	5	28	4
1940	151	38	7	15	39
1950	372	40	16	13	76
1960	756	90	30	26	65
1970	1752	146	110	110	123

『諸外国における日本文化研究の現状』国立民族学博物館

うすると、専門志向的日本研究から日本学的日本研究へと、西洋の変化とは異なる発展の系列をここに見ることになるのである。日本学は日本研究の出発点であると同時に、ある国々では日本研究の未来像かもしれないのである。

(3) 専門志向的日本研究

まず最初に、日本研究者の数的な増加を見ておこう。表からも明らかのように、日本研究者が急速に増大したのは1960年代以降である。それは、いうまでもなく日本の高度経済成長と関連している。日本学が古い日本の研究を中心としていたのに対して、60年代以降に新たに登場してきたのは近代・現代の日本に対する関心であった。

日本の過去ではなく現在や現在に先行する時代に対する関心は、新しい日本研究のタイプを生み出した。高度産業社会としての日本は、西洋のそれらの国々と同じような枠組みや手法で研究ができるようになったと考えられた。現代日本の産業構造や経済成長、階層構造や投票行動、学校体系や労働市場など、従来の日本学ではほとんど取り扱われなかった研究テーマが次々に登場した。

一見しても明らかのように、これらの新しい研究テーマは、経済学や政治学や社会学の本格的トレーニングなしには、高次元の研究をすることができないものばかりである。こうして、新しいタイプの日本研究が生まれてくることになった。現代の日本経済を研究している学者がいたとしよう。その研究者は、日本学者でも経済学者でもどちらを名乗ってもよいのだが、多くの場合、自分のことを日本学者ではなく経済学者だと主張するだろう。なぜなら、アカデミックな研究とは「専門」に基づいた研究でなければならず、「理論や方法」が弱い日本学ではアカデミズム的な価値が低いと見なされがちだからである。

すでに述べたように、日本学という学問が成立したのは、東洋学という大きな研究の単位から、日本という新たな研究の単位が分離したからである。それは一種の専門化だといってよい。ところが、ここでは性格の異なる専門化が進んでいるのである。アカデミズムの世界で正当な評価を得るためには、特定の「地域」の専門家である以上に特定の「専門」(discipline)のプロとして評価される必要があると思われるようになったのである。

研究者とはプライドの動物である。知的な評価も社会的評価も、「地域」研究の専門家としてより、「専門」の分野の研究者と見なされたほうが望ましいと思うようになれば、日本学から専門志向的日本研究者になるのは必然である。

1988年のアメリカアジア学会の日本研究者調査によると、専門志向的日本研究はますます進行していることが明らかになっている。すなわち、「地域研究からの脱皮」「歴史学・政治学・社会学など伝統的学問分野の一員としての自覚を持つ日本研究者新世代」が拡大してい

るのである。このような事態がさらに進めば、自分はたんなる政治学者や経済学者であって、日本の事例をよく引き合いに出しているだけであって、日本研究者などではないということになるであろう。

このような事態を、どのように考えたらいいだろうか。将来的に日本研究者という意識がなくなり、文学者や歴史学者や経済学者が日本のケースを自由に用いて、普遍性の高い理論を構築していくことになるのは、学問の進歩と見なすべきものであろう。しかし問題は、人間の作り出した文化や社会を研究するとき、現在の学問の水準で「地域」性を無視して生産的な議論ができるかということに尽きるであろう。普遍理論を生み出すためには、まだまだ地域に密着した着実な研究を数多く積み重ねることも必要なのではないか。

(4) 課題追求的日本研究

日本学や専門志向的日本研究は、おもにアカデミズムの枠内での研究活動であった。ところが、ニューストブニーが現代型と呼んだ日本研究の新しい傾向は、アカデミズムの内部に限定されるものではない。むしろアカデミズムの外で生じている現象が、大学などに取り込まれているのではなかろうか。この新しい傾向の日本研究を、研究のスタイルに注目すれば、課題追求型の日本研究と呼ぶことができるであろう。

課題追求型の日本研究が出てきた背景を考えてみよう。世界の国々の相互依存が高まる中で、特に高度産業社会間では、自然環境・都市・老人・女性・交通・福祉・教育・軍事・外交・貿易・金融など、ほとんどあらゆる問題が、共通の枠組みの中で論じることができ、かつ同時代性を帯びてきたということを経験している。自分の国に深刻な老人問題があるでしょう。行政当局は、自国の老人対策の政策立案の参考として日本のケースを検討するかもしれない。企業は当然のことながら毎日、日本の経済分析をおこなっている。それは、産業社会としての文明の大きな枠組みが共通の基盤に立っているために、解くべき「課題」を共有しているということを意味している。現代の日本の研究は、こうして課題追求型たらざるをえないのである。

これも同じく高度産業社会の属性から派生してくるのだが、高度産業社会はそれを情報化社会と呼ぶべきかどうかはさておき、膨大な物的・人的資源を情報の生産と流通に投入している社会である。企業・行政組織・民間調査会社などは、日々膨大なデータを収集し分析している。日本に限らず世界の高度産業社会は常に調査され分析され、また基礎データの集積をおこなっている社会なのである。

このような社会にあっては、大学はかつてのように研究という活動において独占的な地位を占めることはできない。むしろ、大学はデータの収集能力においては、大学外のさまざまな組織に対抗できないまでになっているのである。アカデミズムは、アカデミズムの外部からの競争と刺激に常にさらされている。日本研究もその例外ではない。アカデミズムの研究の基本的枠組みが「専門」というものであったとすれば、アカデミズムの外部の研究活動は、具体的な「課題」なのである。大学の日本研究が課題追求的になっているのは、このような研究環境の変化に適応しようとしたからであろう。

以上のような観点から世界の日本研究を鳥瞰してみると、どのようなことがいえるであろうか。世界の日本研究は、日本学・専門志向的日本研究・課題追求的日本研究のいずれかのタイプに分類することができる。その発展の傾向としていえることは、各国一様ではないということである。日本学を出発点として徐々にそうではないタイプの日本研究を派生させてきた西洋の大きな傾向が、どこでも通用するわけではない。西洋の国の中でも、日本学の伝統がまだ強く残っているドイツやフランス、日本学的な傾向が最も希薄になったアメリカなど、大きな差がある。社会主義圏の日本研究は、これまで一種の課題追求型の日本研究であったが、今後大きく変化することが予想される。

そして最近日本研究が始まった国々では、専門志向的あるいは課題追求的日本研究を出発点としながらも、研究が進むにつれて、現代日本の理解のためには日本の伝統文化や歴史を、専門タテ割的ではなく幅広く研究しなければならないという認識も見られるのである。これは一種の日本学的傾向の出現である。

(5) 日本研究の将来

最後に、日本研究の今後を少々考えてみよう。日本という「地域」研究 (Area Studies) は、なぜ成立するのであろうか。研究を根底で支えてきたのは、異国趣味、研究事例としての興味、政治外交的関心の三者が考えられるが、最も強力に地域研究を支えてきたのはやはり政策的関心である。アメリカのソ連研究や、ソ連のアメリカ研究を考えてみれば、このことは容易に理解できよう。

地域研究は、このような政策学的宿命から完全に逃れることは不可能であり、日本研究もその例外ではない。特にそのプレゼンスが世界の国々に大きな影響をあたえるであろう国は、徹底的に分析し尽くさなければならない。日本研究といえば日本学的な、『源氏物語』の研究的なものを想像していた牧歌的な時代は終わり、新たな段階に入ったのは間違いない。

この変化に対応して、私は2つのことを考える。第1は、アカデミズム内部における3タイプの日本研究の協力関係という楽天的な将来像である。アカデミズムは、基本的には研究の自己目的性と研究活動の個人性に根拠を置いている。研究のための研究、真理探究のための研究というスタイルは日本学にも最もよく当てはまる。課題追求的日本研究はあまりに実用的な「研究」なのではないかという疑問は、日本学を自分の立場とする研究者からはよく提出されているし、それはある点では当たっている。しかし、現代日本を理解するためには、日本学の発想だけではあまりにも漠然としていて、とりとめがないことも確かなことである。

また、専門の絶対性もすでに揺らぎ始めている。政治や経済や文学や宗教というものが、かつてほどには明確な輪郭を持っていない。専門志向的日本研究が、反時代的に専門の権威性を誇示することはできるかもしれないが、1つの「専門」だけに拘泥しては対象の深い分析も不可能になりつつあるのが現代という時代ではなかろうか。

逆に、課題追求型の日本研究は、それまでの専門志向的日本研究の豊富な理論とデータの

蓄積があって初めて可能になっていることも忘れてはならない。「課題」のより深い分析をしていけば、専門志向的な日本研究も、やがては日本学が対象にしているようなレベルの問題にまで問題意識が深められていかなければならないことも確かであろう。

このように考えてくると、3つの日本研究のタイプは対立関係にあるのではなく、うまくいけば相互補完的になりうるということを意味している。あるいはまた、1人の研究者が日本学的発想と課題追求的日本研究とを併用することもできれば、社会学者であり同時に日本学者でもあるという立場も考えられるのである。複雑化した世界を研究するのに、研究者が単純すぎる観点しか持てないとすれば、それは不幸なことといわなければならない。

第2に日本研究の今後を考えると、最も興味を引かれるのは、アカデミズム外の日本研究の今後である。この巨大化し複雑化した現代日本を十分に分析し尽くすためには、大学などのアカデミズムよりも、民間調査会社（いわゆるシンク・タンク）や政府の研究機関のほうがより有効に研究できるのではないかということである。これは、研究の個人性ということと関係している。アカデミズムにおける研究とは、あくまで個人が自分の責任のもとにデータを収集し、分析する。それはまさしく個人主義の原理原則が貫徹している世界である。原則的には、だれも研究テーマを研究者個人に割り振ることはできない。原則的には、だれも研究のデータの収集を他の独立した研究者個人に命ずることはできない。

ところが、日本という研究対象は今や、膨大なデータの収集と、複雑なデータの処理と、その分析を必要としている。このような作業を限られた時間内でおこなうには、研究の集団化をある程度取り入れない限り不可能ではなからうか。大学が、アカデミズム外のこのようなチャレンジに対応してある種の研究の集団化をおこなわない限り、少なくとも現代日本の研究の中心的存在ではなくなるのではなからうか。これは、伝統的な研究者にとっては、非常にペシミスティックな日本研究の未来像ということにならうか。研究の原則を守るのか、研究の効率化を求めるのか。

ともあれ、世界の日本研究の将来は、日本が世界の中でどのような観点から研究されるかということにかかっている。日本が、政略的・戦略的に継続的監視と集中的な分析を必要とする国と見なされるようになれば、日本「研究」はますます盛んになるだろうが、それは現在の日本研究というものの範疇を超えることは確かなのである。